

ウィーン世紀末における科学の総合

(Integration of Sciences in Vienna 1900)

坂 恒 夫
(Tsuneo Ban)

1. 序 論

精神分析学者フロイト、科学思想家マッハ・ボルツマン、法学者ケルゼン、哲学者ブーバー、科学哲学者ノイラート・ウィトゲンシュタイン、文学者ホーフマンスタール、画家クリムト・シーレ・ココシュカ、音楽家マーラー・シェーンベルク、……。これらはウィーン世紀末文化を飾った科学者・思想家・芸術家達である。いずれも人類が解決を迫られている問題に創造的に答えた人達であり、人間を取り囲む世界の隠された意味や新しい姿を発見した人達である。ウィーン世紀末においては、人間活動が様々な領域で開花し、文化が全体的な発達を示すのである。これは世紀末ウィーンにおいて科学の総合が行なわれたことを明示しているのではないだろうか。相互に関連を持つ一つの科学のように、ウィーン世紀末では、多方面で諸科学が発達したのである。科学の創造性と科学の総合の関連の考察を出発点とし、社会における科学の全体的な発達と科学の総合の関連について考えてみよう。

科学の総合は、なぜ必要なのだろうか。社会は科学の総合を、なぜ要求するのだろうか。科学すなわち科学的知識は、本来、行動のためにあるのだった¹⁾。行動すなわち人間を取り巻く環境への働き掛けが首尾よく終るためには、行動の対象あるいは行動の主体に対する精確な知識が必要である。この行動に必要な知識が、科学的知識なのである。行動は、総合的な知識を要求する。行動は、ある対象に対して、ある主体によって、ある社会の中で行なわれる。すなわち

行動が首尾よく終るためには、対象に関する、主体に関する、あるいは社会に関する総合的な知識が必要なのである。行動が関与する事象についての総合的な知識の下においてのみ、行動は所期の成果を得ることができるのである。

それでは科学的活動において重要とされる創造性は、科学の総合といかなる関係を持つのだろうか。創造性とは、解答が分っていない問題に解答を与えることである。解答が要求されている問題に、解答を与えることである。だが解答すべき問題は、行動で出会う問題である。行動を遂行するために解かねばならぬ問題である。行動が解決を迫る問題である。すなわち創造性とは、行動が解決を迫る問題に解答を与えることなのである。このことは創造性と総合性が同じ内容を持つことを教えるのではないか。行動が問題解決のために要求する知識は、前の議論から分るように、行動が関与する諸事象についての総合的知識であった。総合的知識に基づいて行動に対峙する問題に解答を付すことによつてのみ、行動は所期の目的を達成できるのである。すなわち創造的に問題を解決することは、総合的知識に基づいて問題を解決することなのである。創造性とは、問題を解決する総合的知識を見出すことなのである。すなわち創造性は、行動が直面する問題解決の通時的側面であるのに対し、総合性は、その共時的側面なのである。両者は、同じ内容を持つと言えるのである。

ところで一つの社会の文化の多方面な発達と科学の総合はいかなる関連を持つのであろうか。ヘーゲル、コント、ピアジェ等の科学の総合の事例から分るように、科学の総合は個人によって必要性が主張され、個人によってその試みがなされてきた²⁾。科学の総合は、個人の行為のように思えるのである。また総合性と同じ内容を持つと思われる創造性も、個人的行為の過程で生れると思えるのである。社会の文化の全面的な発達と個人の知識の総合的な組織とはいかなる関係があるのだろうか。筆者は、科学の総合は二種類に大別されることを主張してきた³⁾。一つは直前の行動のための総合であり、更に一つは将来の行動のための総合である。ヘーゲル、コント、ピアジェ等の総合は、将来の行

動のための総合であり、行動の準備としての知識の総合である。一方、芸術家・科学者・技術者であったレオナルド＝ダ＝ヴィンチ、社会思想家・作家・音楽家であったルソー等の総合は、直前の行動のための総合であろう。ダ＝ヴィンチは、社会の様々な分野の要求に対して、必要な様々な知識を有機的に総合して、絵画を描くことによって、機械を作ることによって答えたのであり、ルソーは、論文を書くことによって、小説を書くことによって答えたのである。ダ＝ヴィンチとルソーの多方面の創造性は、社会の要求に対して知識を的確に総合して答えた結果、生れたのである。通常の科学者や技術者の専門領域の創造性も、この種の総合の結果と言えるであろう。ウィーン世紀末、イタリアルネサンス等での社会の多方面な分野での創造性は、ダ＝ヴィンチとルソーの多方面な個人の創造性が社会的次元で起こったものと言えないだろうか。個人の心の内部で創造が行なわれるように、社会の精神の内部においても創造が行なわれるのである。社会が、一つの生き物のように様々な知識を総合し、社会の直面する問題に創造的に答えるのである。個人の個々の生における創造・総合がマイクロコスモスの創造・総合であるのに対し、社会の変動における創造・総合はマクロコスモスにおける創造・総合であるのである。

冒頭で述べたように、ウィーン世紀末は多数の偉才を輩出し、多彩な文化を創造した。ウィーン世紀末の文化の創造は、いかなる知識の総合によって築かれたのだろうか。ウィーン世紀末文化を構成するのは、フロイト、ウィトゲンシュタイン、マッハ、クリムト等の創造性である。彼等の創造の基盤となった知識の総合を探ることによって、ウィーン世紀末文化の知識の総合の性格を探ろうとするのが本稿の目的である。

2. 世紀末のウィーン社会

世紀末のウィーン市の人口は、百五十万人前後であった⁴⁾。この多いとは言えない人口の中から世紀末の一時期に、歴史に名を残す偉才がきら星のごとく

生れたのである。この事実は、世紀末ウィーン文化を飾る偉才達はウィーン社会によって生み出されたことを意味しているのではないか。単調な自己再生産を繰り返していたウィーン社会が、十九世紀末に自己の可能性に目覚めたかの様に多彩な天才を生み出したのである。いかなるウィーン世紀末社会が天才輩出の母体となったかを初めに考察することにしよう。

(1) 世紀末ウィーン政治状況

世紀末ウィーン文化を支えたのは、自由主義思想のインテリゲンチヤたちであった。彼等が、世紀末オーストリアでいかなる政治状況に置かれ、いかなる政治的苦渋の中から世紀末文化を生み出したのかを考察することにしよう。自由主義思想は、ウィーン社会のミドル・クラスである新興ブルジョワジーの思想である。ブルジョワジーはフランス革命に代表されるブルジョワ革命によって絶対王政から権力を奪取したが、この権力奪取の正当性の理論的基礎づけに大きな役割を果たしたのが自由主義思想である。だがウィーンのブルジョワジーは、イギリスやフランスのブルジョワジーと違って、自らの力で権力を奪取したのではなかった。1848年に勃発したオーストリアのブルジョワ革命である三月革命は、王政側により鎮圧され、ブルジョワジーに権力を引き渡すことができなかった。しかしながらオーストリアを支える経済基盤の変化は、ブルジョワジーの権力への参加を不可避なものにする。ブルジョワジーは、貴族に加わって政治に参加し、オーストリアを支配するようになるのである。だがブルジョワジーが支配階級に加わってまもなく、ブルジョワジーと対立する新しい階級が政治への参加を要求する。職人・労働者・農民等の大衆が、新しい階級として登場したのである。この新しい階級は、選挙を通して急速に勢力を拡大する。この階級の指導者カール・ルーガーは、選挙によってウィーン市長に選出され、この選出の裁可が一時フランツ・ヨーゼフ皇帝によって拒否されるが、最終的には認められて、ブルジョワ権力に取って代わるのである。

この様に、オーストリア・ブルジョワジーは、フランスおよびイギリスのブルジョワジーとは異なり、貴族を駆逐することにも、それと融合することにも成功しなかったのである⁵⁾。このオーストリア・ブルジョワジーの立場の不安定さは、他国のブルジョワジーとは異なる立場にオーストリア・ブルジョワジーを置くことになる。ブルジョワジーの打倒すべき敵であるはずのフランツ・ヨーゼフ皇帝が、ブルジョワジーの利益を守るために協力せねばならぬ相手となるのである。ブルジョワジーと貴族の間に立つ仲介役を皇帝に期待することになるのである。だが貴族との融合は結局失敗し、ブルジョワジーの心には貴族への憧れだけが残る。融合を拒否された貴族への憧れは、貴族の唯美文化への憧れに転化する。ブルジョワジーは、政治的に貴族に融合する代わりに、精神的に貴族に融合しようとするのである。一般大衆の台頭に不安を覚えながら、政治権力を握る貴族に融合を拒否されて、自らの行動の唯一の可能な領域が、美術・芸術・科学の文化面であることをブルジョワジーは気づくのである。このようなブルジョワジーの追い詰められた精神の中で、世紀末ウィーン文化は壮麗な花を開くのである。

(2) 世紀末ウィーンの世界状況

ハプスブルク家が支配する世紀末ウィーン社会は、国家官僚が支配する官僚社会でもあった。国家官僚は、フランツ・ヨーゼフ皇帝の権力の一部であり、庶民に対して皇帝の権威の絶大さを示すべきものであった。それは、帝国の絶対主義体制の象徴であり、冷酷無比に庶民に迫るはずのものであった。だが、世紀末ウィーンの世界状況は、それとは大きく異なるものであった⁶⁾。ハプスブルク家のオーストリアを規定する精神に、ビーダーマイアー精神がある。これは、牧歌的で人間的な共同社会（ゲマインシャフト）に憧れを持つ精神で、ドイツの合理的なプロイセン精神と対比されるオーストリア独自のものだという。オーストリアの官僚制は、このビー

ダーマイアー精神の影響を受け、中央からの指令を無視するというオーストリア独自の性格を持つのである。例えば下級官僚は、自分と同じ境遇の貧しい人々に同情して泣き落としに応じたり、高級官僚は、支配階級である貴族の意を汲み法を曲げたりしたのである。このオーストリアの尊法精神の欠如は、シュランペライと呼ばれ、世紀末ウィーンを特色づけるものとなっている。このシュランペライによって、ハプスベルク家による絶対主義が人間的なものになり、人間の恣意と工夫によって社会は動くという意識が生まれると同時に、政治が無気力なものとなり、政治の革新性がそがれ、帝国の没落が加速することにもなったのだった。

世紀末ウィーン社会は、少数人種であるユダヤ人が華々しく活躍した社会でもあった。世紀末ウィーン社会を彩ったユダヤ人に、フロイト、ヴィトゲンシュタイン、マーラー、シュニッツラー、クラウス等がいる。いずれも世紀末ウィーン文化を語る上で不可欠な人達ばかりである。彼等は何故世紀末ウィーン社会で活躍できたのであろうか。ユダヤ人が成功した理由に、次のものがあるとされる⁷⁾。ユダヤ人は、民族としての同一性を保つために、ヘブライ語とユダヤ教の教育を行なっていたが、これらがユダヤ人に言語に対する深い理解と抽象的思考力を与えたという。母音を表す文字がない等のヘブライ語の独自の特性が、経験から独立したものとしての言語、すなわち言語の存在上の独自性を教えたのである。一方ユダヤ教は、神の姿の具体的な表現の禁止、戒律が抽象的な神学の学習等が、抽象的思考能力・論理的思考能力を与えたという。また疎外された少数民族の屈辱感も、ユダヤ人の社会的成功のバネになったという。ウィーン世紀末社会には、反ユダヤ主義が渦巻いていた。オーストリアが工業化されると、二極分化が起こり、職人・農民を中心とする一般庶民の貧窮化が始まった。すると金貸し・商業を生業とする豊かなユダヤ人が、怨嗟の的となり、社会の望ましからざるもの全ての原因とされ、差別されたのだった。この社

会の中の明確な位置を持たぬというユダヤ人の不安感が、他人より勉強して世に認められようとする競争心をユダヤ人にもたらしたと言えるのである。

(3) 世紀末ウィーンの意識状況

世紀末ウィーンを生きる人々は、いかなる意識を持って生きていたのか。ヨハン・シュトラウスのワルツを踊り、魅力的なカフェでおしゃべりをする、これらが「夢の都」ウィーンを生きる人々の喜びであり憧れであった。だが「夢の都」ウィーンの神話の裏には、人々の過酷な日常生活が隠されているという⁸⁾。シュトラウスのワルツは、プロシャとのドイツにおける覇権戦争に負けた現実に対する逃避先であり、カフェでのおしゃべりは、暖房がままならぬ陰気でみすばらしい労働者のアパートの裏返しだといっているのである。この様に、世紀末ウィーンに生起する事象は、すべて両義性を帯びているのである。豪奢で華麗な世紀末ウィーン文化の背には、貧弱なウィーン社会が隠されていたのである。社会事象だけではなく人々の意識の中にも、両義性があるといえよう。上述のシュランペライは、官僚の言葉に表と裏があること、すなわち両義性があることを示している。また、若い女性に対する上層階級の厳しい倫理性と下層階級の開放性、各階級の政治における主張のイデオロギー性、オーストリア・ハンガリー・チェコ等の多民族国家から結果する解釈の多義性も、両犠牲の意識を育んだに違いないのである。この様に、両義性は世紀末ウィーン社会の社会意識となっていたのである。

ところで、この両義性によってウィーン文化が開花した、と言えるのではないか。両義性は、表面の後ろに裏面があること、理性の後ろに欲望があること、秩序の後ろに無秩序があること、正義の後ろに不正義があること、誤謬の後ろに真理があること、を教えるのである。この表面に表われているものに対して、隠されているものを記述することが、科学・学問・

芸術の創造性ではないだろうか。表の現われの後ろの真理を記述することが、科学・学問・芸術ではないだろうか。この様に、世紀末ウィーン社会の社会意識の両義性が、文化の創造の一つの契機となったのである。

世紀末ウィーンの作家R. ムーヅルは、両義性はハプスブルク帝国そのものの構造の表現だという。ハプスブルク帝国は、いかなる国なのか。それは、オーストリア＝ハンガリー王国と名乗っていたが、通常単にオーストリアと呼ばれる国であった。それは、憲法上では自由主義の国であったが、政治上ではカトリック教権主義の国であった。この国では、形の上では議会があったが、それは閉会されたままであった。このようにオーストリアは、形式と実質が相違するもの、すなわち両義的な性格を持つ国だったのである。

自国の存在の両義性により、すべての存在の両義性を、人々は確信するようになる。存在するもののすべてに、形式と実質の二面があると確信するようになる。実質は逃れる術のない現実なのだから、人々は形式を重視するようになるのである。世紀末ウィーン社会においては、社会の形式である宗教儀式・国家儀式は、形式を重んじる豪華なものであった。人間に大切なものは、心情・人生観等の中身ではなく、外観・気取り等の見せ掛けであった。世紀末ウィーンの人々は、逃れられない過酷な現実に向き、表面的な装飾を重視したのであった。立ち向かわねばならぬ過酷な現実から目をそらし、シュトラウスのワルツ「美しき青きドナウ」に踊り興じたのである。世紀末ウィーン文化の創造性は、過酷な現実を隠蔽する華麗な虚飾性という両義性に、少数の天才が気づいたところに成り立つと言えるのである。

3. フロイトにおける創造

精神分析を創始したジークムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856～1939)

は、成し遂げた仕事の内容の点からも、それが与えた後世への影響の点からも、世紀末ウィーン文化を最も代表する人物であることは明らかである。ここでフロイトが、世紀末ウィーン社会でいかなる創造を行ない、それが世紀末ウィーン社会の政治・生活・意識および他領野の文化といかなる関連を持っていたか、を考察することにしよう⁹⁾。

(1) フロイトの創造

フロイトは、精神的原因によっても精神障害が生じると主張する。精神障害は、脳という物質の機能の障害によるのではなく、精神という心の機能の障害によっても生じると主張するのである。脳の組織に異常がなくても、精神の構造に異常があれば、人間は精神を病むというのである。このフロイトの主張は、科学の世紀と呼ばれ、科学的思考を重視した十九世紀の世紀末文化に大きな衝撃を与えることになる。十九世紀の科学主義は、物質界には物質の法則が成り立ち、精神界には精神の法則が成り立つ、というキリスト教に起因する二元論を克服するところに生れたものである。すなわちフロイトの主張は、物質のみが存在するとする科学主義の一元論を否定し、物質－精神の二元論を復活するものであり、世紀末の知識人・科学者を論争の坩堝に陥れたのである。

精神障害が精神的原因によって生じ、その原因を探るのが医者の仕事だとすれば、原因は患者に隠されていることになる。人間には、意識が及ばぬ精神の領域があることになる。フロイトは、この精神の領域を「無意識」と名づける。精神の内部で生じる事象のすべてを、人間は意識しているのではなく、意識が及ばぬ無意識があって、これが人間の行動を規定する、とフロイトは主張するのである。それでは無意識は人間の行動をいかに規定するのだろうか。フロイトは、精神を「エス」、「自我」、「超自我」の三つの領域に分ける。エスは、生命の維持・種の維持のために、本能という形で人間の行動に影響する領域である。自我は、私であるという意識、す

なわち自分で組織し得る精神の領域である。超自我は、教育・倫理あるいは伝統等によって社会が刻み込んだ精神の領域、すなわち社会の要求・強制・願望を代表する精神の領域である。エスによる生物としての欲求と、超自我による社会からの強要に晒されながら、自我は、両者を折り合わせ、人格としてのまとまりを保つのである。人間の精神の外部への現れには、エスと超自我の間の葛藤という無意識が隠されているのである。

様々な本能の中でもフロイトは、とりわけ「性本能」を重視する。性本能は、生物にとって根元的な本能であることから、大きなエネルギーを含んでいて、新生児の頃から既に発現があるという。すなわち人間は子供の頃から性本能と闘っているのである。だが子供は自我が弱く性本能との葛藤をうまく解決できない場合が多いという。解決に失敗すると、子供の自我は、性本能との葛藤を押え込むことによって、一時的な解決を計る。これが「抑圧」である。抑圧においては、性本能のエネルギーは消失したのではなく、活性化したまま無意識の下に蓄えられており、何かの原因で抑圧が弱くなると外部に噴き出して、精神を異常にするという。これが神経症である。大人においても、葛藤の解決に失敗すると、抑圧が起こって、神経症が発生する。だがフロイトは、大人の神経症は二―六才の幼児期の抑圧が原因となって発現する場合が多いとする。幼児期の性的葛藤の解決の失敗が、大人の神経症の原因だというのである。大人の精神生活の大きな部分が、幼児期の性的な精神生活から決まると主張するのである。この幼児期の性的葛藤を明らかにして、自我の支配に服せしめること、すなわち幼児期の性的葛藤を理性的に解決させることが精神分析医の仕事だ、とフロイトはいうのである。

(2) 創造の社会的基盤

社会に衝撃を与えたフロイトの学説の創造性は、何から派生したのだろうか。創造性が、ある領域の概念の他の領域への適用、すなわち複数の領

域の概念の統合・総合であるとするならば、フロイトは、いかなる総合を行なったのだろうか。歴史学者W・M・ジョンストンは、フロイトの精神分析には世紀末ウィーンの姿が反映しているという¹⁰。すなわちフロイトが主張する精神の世界は、ウィーン社会を内面化したものなのである。フロイトの精神の世界は、ウィーン社会と同じ構造を持っているのである。

フロイトの創造性の第一のものは、物質とは独立した精神世界の存在の主張であった。フロイトは、この着想をウィーン社会の何から得たのだろうか。フロイトが属していたのは、自由主義のブルジョワ階級である。世紀末オーストリアのブルジョワ階級は、既にオーストリアの支配階級ではなかった。貴族の支配階級に加わってまもなく、一般大衆の台頭にあって権力を失いつつあったのは、前に述べたことである。権力を無くしたブルジョワジーがしたことは、唯美主義への逃避であった。ブルジョワジーは、政治の世界から、芸術の世界に逃避したのである。すなわち政治という物質の世界から、芸術という精神の世界に逃避したのである。この様なブルジョワジーにとって、精神世界は無くてはならないものであった。何故なら精神世界が虚構であれば、自らの存在も虚構になるからである。それは物質から独立していなければならなかった。なぜなら物質である政治は、既に失っていたからである。これは物質－精神の二元論であり、フロイトの主張と合致することは論を待たない。

それではオーストリア・ブルジョワジーは、この唯美世界への自らの逃避を意識していたのだろうか。ブルジョワジーは、権力の世界の支配権を失ったから、精神の世界に逃避したのである。権力を無くした現実を直視し得ないから、精神の世界に逃避したのである。すなわちブルジョワジーは、心底から唯美世界に最高の価値を置いているのである。ブルジョワジーは、無意識裏に精神世界に逃避しているのである。フロイトは、この自らの階級の無意識裏の逃避から、精神世界の無意識の着想を得たのではない

だろうか。また、世紀末ウィーンには催眠術が流行していたという。催眠術は、精神に働き掛けて、違う人間を作る術である。この催眠術の流行も、フロイトの着想の助けになったに違いないであろう。

精神構造の要素であるエス・超自我に対応する社会的事象は何だろうか。オーストリアでは、良家の若い女性に対する嫉は非常に厳しかったという。若い女性は、性的に隔離され、性的無知の状態に置かれていたという。一方、庶民の若い女性は、性的に開放され、適当に男性の相手をするものも多かったという。この若い女性が作家・画家の恋人となって、小説あるいはキャンバスに描かれ、ウィーン文化を飾ることになったことは周知のことである。この様にウィーン社会には、性本能に対する強い圧迫と、性本能に対する強い欲望が、存在していたのである。このウィーン社会の性本能に対する欲望と圧迫が、フロイトにより精神の世界に移された、と言えるのではないか。性への欲望がエスとなり、性への圧迫が超自我となったのではないか。また、ウィーン社会は強固な官僚社会であった。官僚制による大衆への圧迫と、その下で渦巻く大衆の欲望も、フロイトの精神分析のモデルとなったのではないか。大衆への圧迫が超自我となり、大衆の欲望がエスとなったのではないだろうか。

幼児期に受けた精神的苦痛が、成人の神経症の原因になる、というフロイトの学説は、いかなる社会事象からの帰結であろうか。人間と社会あるいは人間と自然が、有機的関連を持つ過去の田舎社会に憧れる、というビーマイヤー精神が、オーストリア文化の特色であることは、前にも述べた。このことは、社会の過去の記憶が現在に生きて、一つの機能を果たしていることを意味するのではないか。過去の記憶が、現在の精神に、影響を与えているのである。また、フロイトが属するユダヤ社会は、非ユダヤ社会から様々な圧迫を受けてきた。この圧迫が、ユダヤ人の反抗心を刺激し、ユダヤ人の社会的地位の向上に役立ったことは、前に述べたことであ

る。フロイトにおいても、幼少期に獲得した価値観あるいは屈辱感を、発展あるいは克服する試みが、フロイトの一生だったのである¹¹⁾。フロイトの幼児期の記憶が、現在のフロイトの精神を、規定しているのである。これらのことから、過去にこだわるというウィーン社会の精神状況、過去に規定されて生きるというフロイトの自己分析が、フロイトの学説を生み出したと言えるのでないか。

これらのことから世紀末ウィーン社会が、フロイトが主張する精神分析の世界であることが理解できよう。フロイトは、世紀末ウィーン社会の力動的モデルを精神世界に持ち込むことによって、精神世界を理解しようとしたと言えるのである。

4. マッハにおける創造

科学哲学者エルンスト・マッハ (Ernst Mach, 1838～1916)は、世紀末ウィーンの最も知的な人物の一人で、オーストリアが生んだ最も生産的な思想家の一人だといわれる¹²⁾。マッハは、当時のオーストリア (現在のチェコスロバキア) のモラビア地方で生れ、ウィーン大学で数学と物理学を学び、1860年物理学の学位と教授資格を取った。その後グラーツ大学、プラハ大学等で物理学を教えながら、科学史・科学哲学に対して積極的な提言を行い、科学史家・科学哲学者としての地位を築いた¹²⁾。この様なマッハの科学哲学者としての独創性と、それがウィーン社会でいかに築かれたかを見ることにしよう。

(1) マッハの創造

マッハは、ウィーン社会で何を主張したのか。マッハは、経験の唯一の要素は感覚であると主張する。経験は、例えば「私の林檎狩りの経験」は、林檎という物体に対する私の振舞を、私という自我がいかに受け止めたかを表し、物体に対する自我の統覚の全体を表す、と通常考えられている。だがマッハは、これは自我の構築物であり、純粹経験ではないと主張する。

本当の経験は、事象の我々への直接的な現れ、すなわち我々の前に連続して流れる感覚であると言うのである。今まで経験を記述するのに使用された物体・因果・物自体・自我・意志・目的等の概念は、形而上学的産物であり、実在のものではなく、認識のための虚構に過ぎぬと言うのである。この様にマッハは、超感覚的な世界を実在と考える形而上学を徹底的に指弾し、感覚的現れのみを実在と考える現象論的立場を取る。これがマッハ科学哲学の大きな特色となっている。

物体・因果等の科学的概念が、形而上学的概念だとして否定されるならば、人間にとって科学はいかなる意味を持つのか。マッハは、科学は思考を経済的行なうために存在すると主張する¹⁴⁾。科学は、有用性の観点から存在を認められるのである。例えば物理学の落下運動について見てみよう。マッハによれば、時々刻々変化する物体の位置の視覚が純粹経験である。だが、その感覚は単なる現れであって、人間の生存に役立たない。人間の周りで生起する事象は、予測という再現性がある初めて役立つのである。事象の再現性を求めて、人間は、時間・位置・速度・加速度等の概念を設定し、それらの間の関係を調べるのである。こうして得られた数学的關係式を法則として提示するのである。得られた法則は、法則の再現性により事象の変化の予測を可能にし、人間の生存に役立つのである。この様にマッハは、思考の経済の観点から、科学を捉え直すのである。

また科学には様々な学説がある。例えば熱現象を説明する学説には、カルノーの熱機関モデル、マイヤー・ジュールのエネルギー論、マックスウェル・ボルツマンの分子運動論等がある。マッハは、これらの学説をいかに位置づけるのだろうか。真理は一つであるから、これらの内の一つが正しいと主張するのだろうか。マッハは、いずれの学説も事象を正確に記述する限り正しいと主張する。マッハは、更に、この様な様々な学説が提出される理由を、社会の理解が得易い記述モデルが、社会の変化と共に変わる

からだとする¹⁵⁾。科学における事象の記述は、知悉の事象すなわちモデルとの比較による記述であるという。例えば熱現象を、カルノーは熱機関をモデルとして、マイヤー・ジュールはエネルギーの流れをモデルとして、マックスウェル・ボルツマンは分子運動をモデルとして、記述しようとしたのである。科学は、事象そのものの記述なのではなく、既知のモデルとの比較による事象の理解なのである。ところが社会が分り易いとするモデルは、時の変遷と共に変化する。すなわち社会は、最も分り易いモデルによる記述を、科学に対して要求する。これが、科学に様々な学説が存在する理由だ、とマッハは主張するのである。

(2) 創造の社会的基盤

マッハの科学哲学は、印象主義の哲学と言われる。印象主義は、「都会生活特有の、変わりやすさ、神経質なりズム、突然鮮やかに浮かんではすぐまた消える印象などを表現する都市の様式」であると、美術史家A・ハウザーは定義する¹⁶⁾。すなわち印象主義の哲学は、事象に直接関わらず眺める人の立場に立つ哲学で、偶然的な瞬間のみが真の存在であるとする哲学である。感覚が唯一の経験の要素であるとするマッハの科学哲学が、印象主義の哲学と言われる所以も、これから理解できよう。ところで印象主義の哲学は、ウィーン世紀末のオーストリア・ブルジョワジーの置かれた立場を表現する哲学ではないだろうか。オーストリア・ブルジョワジーが、貴族階級に加わって政治権力を得てまもなく、一般大衆の台頭によってその地位を脅かされていたことは、前に述べたことである。すなわちブルジョワ階級は、実質的に権力を握っていた貴族階級と、大衆運動によって権力を得つつあった一般大衆の間で、宙ぶらりんの状態にあったのである。政治および社会は、ブルジョワ階級の外で動き、彼等はそれを見守る以外になす術がなかったのである。すなわちブルジョワ階級は、彼等の外で生起する社会事象を、遠くから眺めていたのである。この立場を概念化したも

のが、印象主義の哲学であることは、容易に理解できよう。マッハは、自らが属するブルジョワ階級の置かれた立場を、科学に対する解釈に持ち込んだのである。換言すれば、マッハが置かれた立場が、科学に対する新しい解釈を、マッハに気づかせたのである。

それではマッハの形而上学批判は、いかなる動機に基づいているのか。形而上学は、時々刻々の移ろいを見せる感覚的な物に対して、一定不変で超感覚的な存在の諸規定等を考察する学問である。世紀末ウィーン社会において、形而上学的なもの、すなわち変化を超越して人々の存在を規定するものとは何だろうか。それは、フランツ・ヨーゼフ皇帝であり、帝国の官僚制ではないだろうか。皇帝は神が授与した絶対支配権を持つものであり、帝国の官僚制は皇帝の支配権が具体化したものであって、本来、これらは人々の存在を強制的に規定する超越的なものである。これらは、人々の行動によって変え得るものではなく、逆に行動を規定する形而上学的なものなのである。だが前に述べたようにハプスブルク絶対主義は、崩壊の兆しを見せていた。プロシア・イタリアとの戦争の敗北により国家は著しく弱体化していた。官僚制も形式主義がはびこり、改革の精神は弱く、シュランペライにより中央の命令が骨抜きにされていたのである。このようなハプスブルク絶対主義の弱体化が、永遠に不変であるはずのものが過渡的なものに過ぎなかったという意識を生み、マッハの形而上学批判の契機となったのではないだろうか。

マッハの科学哲学は、単なる印象主義ではなく、実証主義の混じった印象主義であるとされる。マッハは、単なる感覚的な現れを重視したのではなく、一つの事象の記述の多様性・恣意性を強調したのである。これはマッハが物理学者であったからであろうか。筆者は、これもマッハが属するブルジョワ階級の意識の現れであると考えている。ブルジョワ階級は、本来、産業資本家の階級である。意識・観念を重視する階級ではなく、物質・権

力を重視する階級である。その様な階級が権力をなくし、言葉という観念で社会に参加している。物質・権力を得るために、様々な言葉を投げているのである。だが投げた言葉は、物質・権力を欠いているために、ブルジョワ階級の願望に過ぎず、恣意的なものにならざるを得ない。このマッハが属する階級の特殊性が、印象主義を実証主義的なものにしたのではないだろうか。ブルジョワ階級の言葉は、物質・権力を欠いているが故に印象主義的であるが、それらを求める階級の言葉であるが故に実証主義的なのである。物質・権力の裏づけを欠いたブルジョワ階級の言葉は、社会状況の変化によって変わる多様性と恣意性を帯びた実証主義的な言葉にならざるを得ないのである。

5. ウィトゲンシュタインにおける創造

言語哲学者L・ウィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein, 1889-1951) は、ウィーン生れのユダヤ人である¹⁷⁾。父親カール・ウィトゲンシュタインは、工場技術者として出発したが、鉄鋼会社の経営に成功し、一代でオーストリア有数の富豪となった人物である。機械好きだったウィトゲンシュタインは、ベルリンの工科大学に二年間籍を置いて後、イギリスのマンチェスター大学で航空学を専攻する。その後、ケンブリッジ大学に移り、B・ラッセルとG・E・ムーアの下で哲学を学び、言語分析の基礎となる『論理哲学論考』を書き上げる。家庭的には決して幸福ではなく、生涯独身で、男の兄弟五人のうち三人が自殺している。ウィトゲンシュタイン自身も、自己の自殺に対する恐れを生涯持ち続けていたという。金銭的には淡泊で、父から贈られた莫大な遺産を、惜し気もなく他人に与えている。また職業も転々と変えて、技師・哲学者・教師・庭師・建築家・哲学教授・衛生兵・実験助手等、様々な職種に就いている。

(1) ウィトゲンシュタインの創造

ウィトゲンシュタインは、「人間が語り得るものは何か」の問いから思

索を始める。凡てのものについて人間は語るができるのだろうか。自然について、社会について、人間について、精神について、人間は語るができるのだろうか。ウィトゲンシュタインは、語ることは語られるものの言語への写像を作ることだ、とする写像理論を展開する。世界について語ることは、言語を用いて世界についての像を作ることだというのである。言語には言語固有の論理形式があって、この論理形式の中で世界の像を作ることが、世界について語ることだというのである。例えば、言語と同じ様に世界についての表現が可能な絵画について考えてみよう。絵を描くとは、絵の具・キャンバスによって与えられる表現形式の中で、像を作ることである。描画理論・色彩理論で論じられる表現形式の中で、世界についての像を作ることが、絵画を描くことなのである。同じ様に、言語が持つ論理形式の中で世界についての像をつくることだ、世界について語ることだとウィトゲンシュタインはいうのである。

このウィトゲンシュタインの写像理論には、語られるもの・語るもの・語られたものの三つの要素がある。語られるものは、対象であり、世界であり、事実である。語るものは、言語であり、形式であり、命題である。語られたものは、像であり、思想であり、意味である。ウィトゲンシュタインは、これらの三つの要素は明確に区分せねばならぬと主張する。語られるものは、語り得るものであり、語り得るものは、語り得るものである以上、明晰に語り得ると主張する。一方、語るものは、語る手段である以上、語ることは出来ぬとされる。ちょうど、絵の具・キャンバス・描画理論等は、絵画によっては表現できぬ様に、言語そのものは、言語によっては表現できないのである。言語は論理形式の中に世界を表現するが、論理形式も語る手段である故、語ることは出来ないのである。語られたものも、語られたものでありこれ以上語ることは無意味であるから、語ることは出来ぬものなのである。それでは、何が語り得るもの・語られるものなので

あろうか。ウィトゲンシュタインは、自然のみが語り得るものだという。自然科学の対象である自然のみが、語り得るものだということである。自然科学の命題のみが、真なる命題で、世界における事実を語るというのである。

それでは、語り得ぬものとされる論理形式に対して、我々はいかに対処すればよいのか。これは通常哲学の中で議論されていたものではないか。ウィトゲンシュタインは、論理形式は語られたものの中で、すなわち命題の中で、自ら示されるものだという。論理形式は、語られるものではなく、示されるものだということである。絵の具や描画理論が、絵画の中に描かれるものではなく、絵画の中で示されるものである様に、論理形式は、命題の中で語られるものではなく、命題の中で示されるものだということである。今まで哲学は、記述論理・記述形式について議論してきたが、これらの議論は無意味であるとウィトゲンシュタインは主張する。哲学の目的は、命題の論理の明晰化にあるのであって、語ることにあるのではないというのである。語り得ぬものについては、沈黙せねばならないということである。論理形式だけではなく、倫理・価値・宗教についても、語り得るものではなく、示されるものだウィトゲンシュタインは主張する。これらについて語ることは、無意味であるから沈黙せねばならぬ、とウィトゲンシュタインは主張するのである。

(2) 創造の社会的基盤

世紀末ウィーン社会では、様々な言葉が飛び交っていた。文芸評論家は芸術作品の倫理性・社会性・適合性に疑問を発し、大衆政治家は自らの置かれた立場の不当性を訴え、ユダヤ・ハンガリー・チェコ等の民族の指導者は権利の拡大を要求し、ブルジョワ階級は産業の育成の必要性を叫び、ローマ・カトリック教会は神への帰依の大切さを説いていた。だが、これらの主張は、願望の表現すなわちイデオロギーに過ぎず、説得力を持たぬ

ものだった。世紀末ウィーン社会には、不毛な言葉が飛び交っていたのである。一方、自然科学に目を転じると、そこには数学という言葉があり、物理現象の正確な記述を行っていた。ウィーン社会には、曖昧な日常言語と正確な科学言語があったのである。この二つの言語の橋渡しを行なって、日常言語から曖昧さを取り払い、語ることのできるものの限界を示そうとしたのが、ウィットゲンシュタインであるということができよう¹⁸⁾。

あの様な言語分析を、ウィットゲンシュタインは、何故行ない得たのであろうか。工科大学に籍を置いていたウィットゲンシュタインは、物理学の方法に深く通じていた。物理学は、数学によって組み立てられた物理モデルを、自然現象に適應させることによって、自然を記述する。このとき、自然は記述されるもの、数学は記述するもの、物理モデルは記述されたものである。ここで数学は、物理モデルによる自然記述の真偽に関係しないことに注意しよう。数学は、数学によって記述されるものではなく、自然記述において示されるものなのである。数学は、記述され得ないのである。この事実がウィットゲンシュタインに前述の言語分析を着想させた、と言えるのではないか。

それでは、何故ウィーン社会で日常言語の曖昧さの除去が必要となったのだろうか。上に述べた様に、ウィーン社会では様々な言葉が飛び交っていた。様々な価値・様々な願望・様々な利害が、社会崩壊の危機意識の中で、自己主張をしていた。だが、この強い自己主張の裏には、価値・願望・利害の正確な把握への希求があった、と言えるのではないか。不毛な言葉の投げ合いの中に、正確な言葉・正しい人生への強い欲求があった、と言えるのではないか。このことは、人間存在の不条理を説いたショーペンハウエル、神による人間の救済を説いたキルケゴール、芸術の本来の在り方を説いたトルストイが、世紀末ウィーン社会で広く読まれたことから理解できよう¹⁹⁾。人間・社会・芸術の本来の在り方に対する強い社会の希求に、

ウィトゲンシュタインは、言語分析を行なうことによって応えたのである。人間・社会・芸術についての無意味な議論を止めさせ、これらを人間存在の本来の位置に置くことによって、社会の要求に応えようとしたのである。

最後に、ウィトゲンシュタインが言語分析を行なった個人的契機を考えてみよう。ウィトゲンシュタインを形容する言葉に次のものがある；完全主義者、聖者、神秘主義者、禁欲主義者、個人主義者。これらが暗示するウィトゲンシュタインの姿は、誠実に自己の信念に従う孤高の人の姿である。このことは、父親からの遺産をすべて他人に与えたこと、『論考』の完成により哲学の問題をすべて解決したとして哲学を止めてしまったこと、不治の病の宣告を素直に受け入れ治療を拒否したこと、からも分かるであろう。このウィトゲンシュタインの性格が、ウィーン社会の言葉による不毛な議論を見逃し得ず、言語の適切な使用の研究に向かわせたと言えるのではないか。

6. クリムトにおける創造

世紀末オーストリア芸術において指導的役割を果たした画家グスタフ・クリムト (Gustav Klimt, 1862~1918) は、金細工師を父としてウィーン近郊の村で生れた²⁰⁾。庶民階級出身のクリムトは、通常の学校教育を八年間受けて後、工芸学校に入学して、歴史主義の古典絵画を勉強する。絵画の基礎を学習し終えたクリムトは、マッシュ、弟エルンストと共に、ウィーンの建物の絵画装飾を引き受けて、生計を立てることになる。社会の評価も徐々に高まり、1891年に美術史美術館の壁画を、1894年にウィーン大学の壁画の依頼を受けるまでになる。また、若い芸術家の信頼も高まり、外国芸術の積極的導入を目指す分離派の会長に、1897年選出される。だがウィーン大学の講堂の装飾画があまりにも先進的であったことから、スキャンダルに巻き込まれ、大学・社会・国家との苦闘が始まる。その一方、1902年の分離派展にベートーヴェン・フリーズを

出品し、装飾画に新しい様式を提示することになる。だが1905年、絵画の在り方をめぐる意見の食い違いから分離派を脱会し、以後、装飾的で耽美的な人物画・風景画を描き続けるのである。

(1) クリムトの創造

上述の略歴から分かる様に、クリムトの創造は、三つの時期に分けることができる。美術史美術館とウィーン大学の壁画の時期、ベートーヴェン・フリーズの時期、装飾的な人物画と風景画の時期である。この順序に、クリムトの新しい造形を考えることにしよう。政府は、新設されたウィーン大学の講堂を飾る三つの天井画を、クリムトに依頼した。天井画は、合理精神をたたえる啓蒙主義的な「闇に対する光の勝利」というテーマで、哲学・医学・法学について描くものだった。クリムトは、1900年に「哲学」を、次いで1901年には「医学」を提出した。これらは、大学・政府が期待したものではなく、ウィーン社会を論争の坩堝に落とし入れた。だが作品は、今までの絵画に見られない新しい様式を含んでいた²¹⁾。「哲学」で描かれたのは、宇宙のカオスと流転する生命、と言えるものだった。様々な色と様々な大きさを持つ星が、調和と群れをなして散在する。この色彩のうねりを見詰めていると、人間の顔が化石の様に浮かび上がる。宇宙の顔である。画面の左上から様々な人間が、光の長い帯の様に舞い降りてくる。無邪気な子供、輝く肉体の若い女、愛し合う男女、苦悩に慟哭する人間、絶望の白髪老人、……………²²⁾。現実の社会そのままである。この絵画が、大学・政府が期待した歴史主義の絵画、例えばラファエロの「アテネの学堂」と、いかに異なるかは容易に理解できよう。

1902年、マックス・クリンガーの彫刻「ベートーヴェン像」の展示会があり、分離派の芸術家はそれぞれの作品で展示館を飾ることになった。クリムトも「ベートーヴェン・フリーズ」を描いて協力したが、これがクリムトの芸術の転回点となった。展示作品は「ベートーヴェン像」を中心に

配置され、室内装飾として全体的調和を持つように制作された。「ベートーヴェン・フリーズ」は、シラーの「歓喜の歌」を基に「第九交響曲」を作曲したベートーヴェンを頌するもので、「幸福への憧憬」、「敵対する暴力の群」、「幸福への憧憬は詩の中で満たされる」の三枚のパネルから構成されている。タイトルから分かる様に、人類の幸福への憧憬は、敵対する暴力との戦いを経て、詩（ポエジー）の中で満たされることが、テーマとなっている。この耽美的人生観をクリムトは、顔・人体・仕草を著しく様式化して、リズムカルに連続するフォルムとして、輝くばかりの黄金色を用いて、描いたのである。室内空間を装飾する絵画として描いたのである。このクリムトの絵画の特色、室内空間の装飾としての絵画・装飾のためのオブジェの様式化・フォルムのリズムカルな装飾としての運動は、クリムトが発見した絵画の形式であると同時に、時代が要求した形式でもあると言えるのではないか。

ウィーン大学の天井画を巡っての大学・政府との激しい論争の後、クリムトは、社会から逃避するかの様に絵画の内容を変えてしまった。それまでの哲学的・寓喩的・社会的な絵画が、個人の居間を飾る肖像画・装飾画・風景画に変わってしまったのである。だが、それらはクリムトの今までの芸術を集大成する個性的なものだった。これを肖像画について見てみよう。クリムトは上流階級の美しい婦人像を数多く描いたが、その一つにアデーレ・ブロッホーバウアーの肖像画がある。肖像画では、頭部と腕は具象的に描かれているが、衣服・壁・床・背景等は極度に抽象化されている。感受性豊かな顔と繊細な手が、キャンバスから浮き出ている。それらの装飾するかの様に、四角・三角・楕円のモザイク状の模様を持った衣装が、下方に大きく広がっている。頭部の後ろには、小さな花のような円が集まって大きな光輪を作り、悲しげな表情の顔と手を装飾しているのである。あたかも顔と手以外のものは、これらを装飾するためにあり、絵画全

体は、部屋を装飾するためにあるかのようである。クリムトの婦人像は、美しく装飾された顔と手が、見るものに優しく訴える絵画なのである。

(2) 創造の社会的基盤

クリムトは、何故あの様な絵画を描いたのだろうか。歴史学者カール・E・ショースキーは、クリムトの絵画は世紀末ウィーン社会の自由自我の危機の表現だという²³⁾。このショースキーの意見を参考にして、クリムトの絵画と社会の関係を考えることにしよう。1873年の経済恐慌・大衆の政治活動等によって、ブルジョワ自由主義の社会基盤が崩れたことは、前にも述べたことである。この結果、自由主義の政治権力が著しく弱体化し、自由主義者の間に、自由主義に対する絶望と嫌悪が生れたという。この自由主義者の意識の変化は、自由主義の若者の間に父親の権威に対する反抗心、すなわち集団的なエディプ斯的反逆を引き起こしたという。このエディプ斯的反逆が、分離派の芸術運動であり、クリムトの芸術的革新なのだ、ショースキーは主張するのである。

ウィーン大学講堂の天井画は、大学が要求した歴史主義的なものとは違って、流動的・抽象的・象徴的な様式で、本能的・性的な内容のものだった。クリムトの歴史主義への反抗は、若い自由主義者のエディプ斯的反逆によるものである。本能的・性的な内容は、ブルジョワ自由主義の実証精神によるものである。ブルジョワ自由主義は、産業資本家の思想であり、本来実証主義的なものなのである。クリムトは、歴史主義を否定することによって父親の世代に反逆し、性的な本能を描くことによって社会の真実を描いたのである。クリムトは、ブルジョワジーの若者として、絵画を描くことによって、社会改革を行おうとしたのである。それでは「ベートーヴェン・フリーズ」では、クリムトは何を行おうとしたのか。この絵画は、「ベートーヴェン像」の展示館を飾るもの、すなわち室内空間を装飾するものだった。一方、ウィーン大学講堂の天井画は、人々に社会の理想・意志・現実

を伝えるものだった。すなわち天井画は、人々に何かを訴えるものであるのに対し、フリーズは、空間を人間的に装飾するものなのである。クリムトは、人々に訴えるためではなく、単に空間を装飾するために、フリーズを描いたのである。これは、クリムトの社会からの逃避と言えないだろうか。クリムトは、自らが社会から逃避するために、人々の逃避空間を創造するために、フリーズを描いたのである。クリムトは、社会の改革を諦めて、装飾空間に逃避したのである。それではクリムトの最後の様式は、クリムトのいかなる意識を表しているのか。「ベートーヴェン・フリーズ」は社会的空間を飾るものであるのに対し、肖像画・装飾画・風景画は個人の部屋を飾るものである。すなわち前者のクリムトは社会的な芸術家であるのに対し、後者のクリムトは個人的な芸術家なのである。後者のクリムトにおいては、社会からの逃避が一段と進んでいるのである。整理すると、政治的権力を喪失したオーストリア・ブルジョワジーは、階級ごと耽美的世界に逃避したと言われているが、この逃避先をクリムトは準備したのである。ウィーン大学の天井画で社会と戦ったクリムトは、頓挫し、耽美的世界に逃避したのである。

7. ウィーン世紀末の科学の総合

これまで、フロイト、マッハ、ウィトゲンシュタイン、クリムトの学説あるいは作品の創造性を調べ、それらがいかなる社会的基盤から発生したかを考察してきた。ここでは、この共通の社会的基盤が科学・哲学・芸術をいかに結び付けているか、ウィーン世紀末の多方面の文化がいかなる総合性を持っているか、を考察することにしよう。

(1) フロイトにおける総合

フロイトは、ウィーン社会の人間相互の心理作用を、個人の心理作用に移入することにより、精神分析のアイデアを得たのだった。フロイトは、

社会の心理作用と、個人の心理作用を比較することによって、精神分析を
発展させていったのである。世紀末ウィーン社会が、神経症を病んでいた
ので、精神分析をフロイトは築くことができたのである。これは、社会科
学と人間科学の総合といえるであろう。フロイトの創造は、社会科学と人
間科学の総合の結果、生じたのである。それではフロイトは、何故、この
様な着想を得たのであろうか。精神分析とウィーン社会の相似性を指摘す
る歴史学者W・M・ジョンストンは、フロイトにはウィーンに対する激し
い愛憎があったという²⁴⁾。ウィーンに対する愛憎があるということは、ウィ
ーンを心底から理解しているということである。ウィーンを肌で理解してい
るということである。このウィーンに対する深い理解が、社会の心理作用
と個人の心理作用の相似を、気づかせたと言えるのではないか。ウィーン
に対するフロイトの愛憎は、ユダヤ人としての屈辱感を与えたウィーンへ
の憎と、故郷としてのウィーンへの愛であろう。すなわちフロイトがユダ
ヤ人であったことが、精神分析を生んだとも言えるのである。

フロイトが徹底した自己分析を行ったことも、精神分析の発展を助けた
のだった。自己の心の中に、無意識・エス・超自我・幼児期の精神的苦痛
等を発見したことが、フロイトに精神分析の正しさを確信させたのである。
精神分析のアイデアを得てまもなく、フロイトは人生最大の精神的危機に
直面したという²⁵⁾。ノイローゼを患ったのである。当時フロイトは、抑う
つ気分・偏頭痛・動悸・不安発作等のノイローゼ症状に悩まされていたの
だった。このノイローゼの克服を通してフロイトは、ノイローゼ患者が示
す抵抗や転移・心的現象の無意識的意味・エディプス複合体等を、自己の
心の中に発見したのである。このフロイトのノイローゼの自己体験が、治
療法としての精神分析の確立に大きく寄与したという。精神分析は、患者
の精神と同じものを自己の精神の中に見出し、自己の精神と同じものを患
者の中に見出すことによって、治療するものである。この患者と医者

神的相互作用が、フロイトの自己体験によって可能になったのである。この様に、フロイトが自己を厳しく見詰めたこと、自己の中に他人を発見したことも、フロイトの創造に役立ったのである。すなわちフロイトの総合は、他人と自己との総合、客体と主体の総合と言えるのではないか。

以上のことからフロイトは、社会と人間の相似性の発見、他人と自己との相似性の発見、すなわち社会と人間の総合、他人と自己との総合によって、創造性を得たということができよう。

(2) マッハにおける総合

マッハの科学哲学は、印象主義の哲学と呼ばれる感覚を重視する哲学で、マッハが属するオーストリア・ブルジョワジーの社会的状況を反映する哲学であった。オーストリア・ブルジョワジーは、実権を握る貴族階級と急速に台頭する一般大衆の間で、社会的影響力を失いつつあった。すなわちブルジョワジーは、外部で展開する事象を遠くから眺めて、解釈する以外なす術がなかったのである。このブルジョワジーの置かれた状況を概念化したものが、マッハの科学哲学であった。マッハは、自らが置かれた社会的状況を、意識的あるいは無意識的に、科学史・科学哲学に適用したのである。科学研究・科学思考・科学理論を、社会で生起する事象のごとく眺めたのである。科学事象を、社会事象のごとく眺めたのである。すなわちマッハの総合は、社会事象と科学事象の総合、と言えるであろう。この事実はマッハの科学哲学の限界をも示すのではないか。マッハの創造は、自らの社会的状況の特殊性を、科学事象に適用した結果、生れたに過ぎないのである。マッハの科学哲学は、新しい事象把握の一つに過ぎないのである。フロイトの創造は、他人と自己の心理作用の不断の同一化によるもので、創造の内容が不断の変わるものだった。一方マッハの創造は、科学事象を社会事象のごとく把握した結果に過ぎず、一面的なものなのである。マッハの思想が、フロイトの思想に比べて評価が低いのは、ここに起因す

るのではないだろうか。

マッハの思考経済の発想は、一つの事象に対する様々な科学的説明の存在、様々な科学の社会における存在を、明快に説明するものでもあった。すなわちマッハによって科学が総合されるのである。科学は既知のモデルによる事象の記述であり、様々な科学が存在するのは分り易い記述モデルが、時代と状況の変化と共に変わるからだ、というのがマッハによる説明である。すなわち事象は、主観が思考の枠組を事象に押し付けることによって、理解されるというのである。これはシステム論の事象把握といえよう²⁶⁾。すなわちマッハによる科学の総合は、システム論による科学の総合なのである。システム論は、機械をモデルとする事象把握の手法で、客体と主体が一つのシステムを作ることにより、事象が把握されるとする立場である²⁷⁾。客体と主体が構成するシステムが違えば、異なる科学になり、様々な科学の存在が説明できるのである。マッハの科学哲学とシステム論を比較すると、論理の厳密性・記述モデルの多様性・記述モデルの合理性の点で、システム論が生産的な事象把握なのではないか。

整理すると次の様になる。マッハは、科学事象を社会事象として把握し、新しい科学観を提示した。マッハの科学哲学は、システム論の事象把握と似ているが、事象把握の生産性において、システム論に劣っている。

(3) ウィトゲンシュタインにおける総合

ウィトゲンシュタインは、世紀末ウィーン社会の矛盾に、正面から立ち向かった知識人であった。ウィーン社会では、社会崩壊の危機から、様々な言説が飛び交っていた。だが言説は、事実の裏づけのない、願望に過ぎぬものだった。この社会状況の中で正確な記述・正しい人生・意義ある行動への強い希求があった。ウィトゲンシュタインは、この社会の要望に言語分析を行うことによって、応えようとしたのである。「語り得るもの」と「示されるもの」を区別することにより、意味ある言説と無意味な言説

を明らかにし、社会の言語的な混乱を除こうとしたのである。

ウィトゲンシュタインは、いかなる手法で言語問題を解いたのだろうか。物理学者ヘルツの『力学の原理』で学んだ物理学の自然現象の把握を、言語問題に適用することによってである²⁸⁾。言語は事象を記述するものである。一方、物理学は自然を記述するものである。言語の記述は曖昧である。一方、物理学の記述は正確である。これらの事実からウィトゲンシュタインは、物理学をモデルにして、言語の解析を行ったのである。事象が言語を用いて記述されるのに対し、物理事象は数学を用いて記述されることから、物理学における数学の役割をモデルに、言語の解析を行ったのである。すなわちウィトゲンシュタインの創造は、物理学と言語学の総合の結果なのである。

ウィトゲンシュタインは、いかなる結論を言語分析から得たのであろうか。ウィトゲンシュタインが得た結論は、自然事象は語り得るものである、言語・論理・価値・倫理・人生は語り得るものではなく示されるものである、であった。すなわち自然事象を除いて人間は語るができないのである。人間にとって大切な価値・倫理・人生は語り得るものではなく、これらについて人間は沈黙せねばならないのである。この結論は、世紀末ウィーンの言語問題を解決したのであろうか。答えは否であらう。ウィトゲンシュタインの結論は、世紀末ウィーンの社会あるいは人生についての疑問に、何も答えないのである。これは言語分析のモデルに、物理学を用いたからではないだろうか。社会あるいは人生について語る言語の分析には、物理学とは異なるモデルを用いねばならないのではないか。

結論は次の様になろう。ウィトゲンシュタインは、世紀末ウィーン社会の混乱を言語の問題として捉え、物理学をモデルとして言語分析を行い、独創的な言語哲学を築いた。

(4) クリムトにおける総合

支配者である貴族階級と台頭する一般大衆の間で、ブルジョワジーが政治的位置の確立に失敗したことは、これまで何度も述べたことである。政治の場で活動する機会を失ったブルジョワジーは、階級全体で芸術に逃避することになる²⁹⁾。他国では貴族に融合するための手段に過ぎぬ芸術が、オーストリアでは、人生そのもの・存在そのものとなったのである。この芸術に逃避したブルジョワジーに作品を供給したのが、他ならぬクリムトなのである。クリムトは、ブルジョワジーの欲求に応える作品を描いたのである。クリムトは、世紀末ウィーン社会の耽美主義への願望に、造形美術の領域で応えたのである。世紀末ウィーン文化は、ブルジョワ自由主義の文化で、耽美主義を特色とすると言われる。ブルジョワジーの耽美主義に応えるクリムトの絵画は、世紀末ウィーン文化の中心に位置する作品なのである。

世紀末ウィーン文化を代表する作品を描いたクリムトは、いかなる生涯を送ったのか。クリムトの生涯は、クリムトの作品を求めたブルジョワ階級が辿った道と似ているのではないか。ブルジョワ階級は、貴族・大衆との権力争いに破れ、芸術に逃避したのである。同じ様にクリムトは、大学・政府との天井画を巡る争いに疲れ、装飾絵画に逃避したのである。クリムトとブルジョワジーは、共に、耽美世界への逃避者だったのである。社会との戦いに敗れ、個人の精神世界に逃避したのである。両者が共に耽美世界への逃避者であることが、クリムトの絵画がブルジョワジーの嗜好に合致すること、すなわちクリムトの芸術の社会への統合を助けたのではないだろうか。

社会からの逃避とされる絵画のなかで、クリムトは何を描いたか。それは耽美世界に逃避したクリムトとブルジョワジーの自らの姿だと言えないだろうか。クリムトの肖像画は、顔と手だけが現実性を帯び、これを装飾するかの様に、身体・衣服・背景等が様式化され、室内空間を装飾するも

のとして描かれている。これは社会の中の足場を無くし社会の飾りものに過ぎぬクリムト・ブルジョワジーの自らの姿ではないだろうか。クリムトは、社会と自己の姿を冷徹に見詰め、キャンバスに正確に描いたのである。この自己の姿を描くというリアリズムが、クリムトの絵画を普遍的なものにし、世紀末ウィーン文化を代表するものにしたのではないだろうか。

クリムトの創造は、自らの芸術を耽美世界への社会の要求に従わせ、社会と自らの姿を社会の要求に合う形で冷酷に描いたこと、すなわち、このような形で社会と自己を総合したことから、生れたものである。

(5) ウィーン世紀末の科学の総合

世紀末ウィーンには、広い領域の文化が開花した。この文化に対して次の疑問を抱いた。文化の創造は、いかなる社会との関係で行われたか。文化の創造は他領域の文化との総合だが、いかなる総合によってウィーン文化は創造されたか。ウィーンに開花した科学・思想・芸術は、いかなる関係を相互に持つのか。これまで最初の二つの疑問について考察してきたが、今までの考察を整理しながら、ここで最後の疑問について考察することにしてしよう。

フロイトの創造は、社会の心理事象と個人の心理事象、他人の心理事象と自己の心理事象を、同一の構造を持つものとして把握したところに成立した。すなわちフロイトは、ウィーン社会・ウィーン市民の精神世界を、精神分析学として描いたのである。マッハの創造は、ブルジョワ自由主義者の印象主義的な事象把握を、科学発達・科学活動に持ち込むことにより行われた。すなわちマッハの科学哲学は、ウィーン自由主義ブルジョワジーの立場で、科学史・科学研究を解釈したものである。ウィットゲンシュタインは、ウィーン社会の言語活動の混乱を是正しようと、物理学をモデルに言語分析を行い、語り得るものと語り得ぬものを明確にしたのである。クリムトの絵画は、逃避者としてのブルジョワジーと自己の姿を、室内空間

を飾る装飾画として描いたものである。すなわちクリムトは、ウィーン社会そのものを、社会が要望する様式で描いたのである。

上述の整理から分かる様に、世紀末ウィーンを飾る文化は、ウィーン社会と密接に絡んでいる。科学・思想・芸術は、世紀末ウィーン社会そのものの表現なのである。だがフロイトの精神分析・マッハの科学哲学・クリムトの絵画がウィーン社会の表現であることは明白であるが、ウィットゲンシュタインの言語哲学については明らかではない。ここで言語哲学の内容とウィーン社会との関係について考えてみよう。ウィットゲンシュタインが行ったことは、語り得るものと語り得ぬものを明確に区別すること、すなわち価値・倫理・芸術を語り得ぬものとして示すことだった。語り得ぬものが語られて、怪物の様になっている言語の使用を、正しい姿に戻すことだった。これはウィーンの姿を描き直すことではないか。言語が混乱しているウィーンの姿を冷徹に眺め、そのあるべき姿を描いたのではないか。これからウィットゲンシュタインの言語哲学も、世紀末ウィーン社会の表現であることが理解できよう。

要約すれば、次の様になろう。世紀末ウィーンに一斉に花開いた多方面の文化は、ウィーン社会そのものの様々な表現であり、様々な領域が制作したウィーンの肖像画と言えるものである。世紀末ウィーン文化は、夫々の領域で夫々のウィーンの肖像画を描くという相互の繋がりを持つもの、すなわち総合的なものだったのである。

8. 結 論

世紀末ウィーンでは、科学・文学・思想・絵画・音楽等の広い領域で個性的な創造が行われたが、これらはウィーン社会の姿の記述・表現・描写と言えるものだった。フロイトの精神分析は人間の精神構造をウィーン社会をモデルに描出したものであり、マッハの科学哲学は科学をウィーン社会の人間行動をモ

デルに分析したものであり、ウィトゲンシュタインの言語哲学は曖昧な言説が飛び交うウィーン社会のあるべき姿を記述したものであり、クリムトの絵画はウィーン社会を肖像画の形で描いたものであった。世紀末ウィーンの諸文化は、ウィーン社会を記述するという共通性を持ち、相互に関連があるものだったのである。世紀末ウィーン文化は、ウィーン社会そのものの記述という総合性を持つものであった。

参考文献

- 1) 科学の総合と人間の行動の関連については、次の文献で論じている。
坂恒夫「行動のための科学の総合」一般教育学会誌（第14巻，第1号，1992年）。
- 2) 今まで行われた様々な科学の総合の試みについては、次の文献で論じている。
坂恒夫「ヘゲルによる科学の総合」岐阜薬科大学教養科紀要（第3号，1991年）。
坂恒夫「コントによる科学の総合」岐阜薬科大学教養科紀要（第1号，1989年）。
坂恒夫「ピアジェによる科学の総合」岐阜薬科大学教養科紀要（第2号，1990年）。
- 3) 坂恒夫「行動のための科学の総合」一般教育学会誌（第14巻，第1号，1992年）。
- 4) 池内紀『ウィーンの世紀末』白水社（1992年），25頁。
- 5) カール・E・ショースキー『世紀末ウィーン』（安井琢磨訳）岩波書店（1983年），23頁。
- 6) W. M. ジョンストン『ウィーン精神』（井上、岩切、林部訳）みすず書房（1986年），28～33頁。
- 7) 文献6），33～42頁。
- 8) トゥールミン，ジャニク『ウィトゲンシュタインのウィーン』（藤村龍雄訳）TBSブリタニカ（1992年），36頁。
- 9) フロイトの業績については、次の文献を参考にした。
R. ウェルダール『フロイト入門』（村上仁訳）みすず書房（1975年）。
ピエール・ババン『フロイト』（小此木監，小林訳）創元社（1992年）。
小此木啓吾『フロイト』講談社（1978年）。
J・A・C・ブラウン『フロイドの系譜』（宇津木，大羽訳）誠信書房（1963年）。
- 10) 文献6），16章。
- 11) 文献5），IV章。
- 12) 文献6），278頁。
- 13) マッハの人物像については、次の文献を参考にした。
マッハ『熱学の諸原理』（高田誠二訳）東海大学出版会（1978年）。

- 本多修郎『図説科学概論』理想社（1968年）。
- 湯川，井上編集『現代の科学 I』（世界の名著）中央公論社（1973年）。
- ジョンストン『ウィーン精神』（井上、岩切、林部訳）みすず書房（1986年）。
- 14) 鞠子英雄「マッハのシステム思想」（鞠子英雄『システムと認識』海鳴社（1987年）に収録）。
- 15) E・マッハ『熱学の諸原理』（高田誠二訳）東海大学出版会（1978年），408頁。
- 16) 文献6），257頁。
- 17) ウィトゲンシュタインの生涯と業績については、次の文献を参考にした。
K・ヴフタール、A・ヒュブナー『ウィトゲンシュタイン入門』（寺中平治訳）大修館書店（1981年）。
- A・ケニー『ウィトゲンシュタイン』（野本和幸訳）法政大学出版局（1982年）。
- 黒田亘編『ウィトゲンシュタイン』平凡社（1978年）。
- ジョンストン『ウィーン精神』（井上、岩切、林部訳）みすず書房（1986年）。
- 18) トゥールミン，ジャニク『ウィトゲンシュタインのウィーン』（藤村龍雄訳）TBSブリタニカ（1992年）。
- 19) 文献18），5章。
- 20) クリムトの生涯と業績については、次の文献を参考にした。
C・M・ネーベハイ『クリムト』（野村太郎訳）美術公論社（1985年）。
- セゾン美術館、朝日新聞社編集『ウィーン世紀末—クリムト、シーレとその時代—』セゾン美術館（1989年）。
- F・ウィットフォード『エゴン・シーレ』（八重樫春樹訳）講談社（1984年）。
- カール・E・ショースキー『世紀末ウィーン』（安井琢磨訳）岩波書店（1983年）。
- G. Frodl, 'KLIMT', Barrie & Jenkins, London, 1992.
- 21) カール・E・ショースキー『世紀末ウィーン』（安井琢磨訳）岩波書店（1983年），V章。
- 22) C・M・ネーベハイ『クリムト』（野村太郎訳）美術公論社（1985年），132頁。
- 23) 文献21）。
- 24) 文献6），16章。
- 25) 小此木啓吾『フロイト』講談社（1978年），125頁。
- 26) 文献14）。
- 27) 坂恒夫「システム論による科学の総合」岐阜薬科大学教養科紀要（第6号，1994年）。
- 28) 文献8），第6章。
- 29) 文献5），25頁。